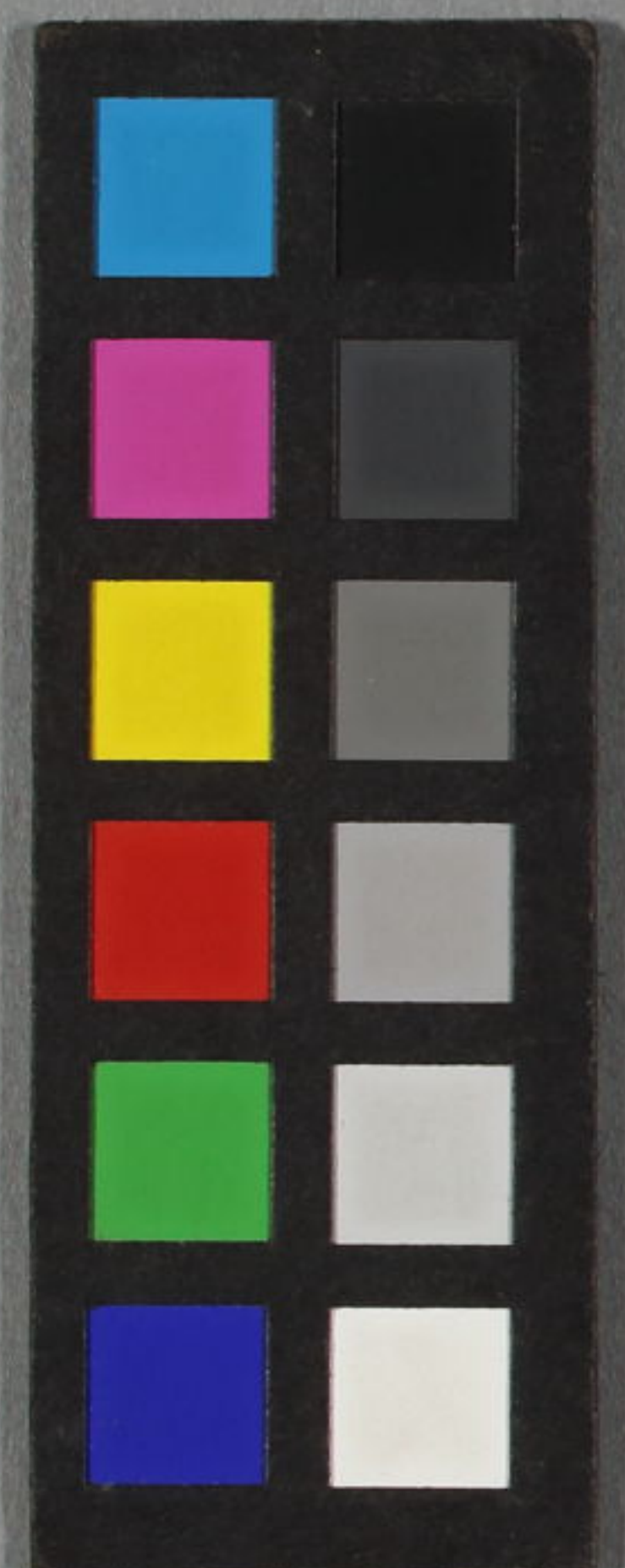
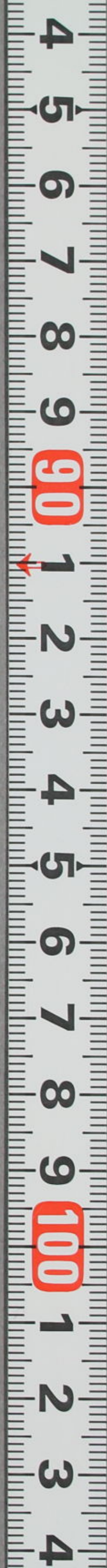




頤林菴句集

亥

5
4130
1



為誰庵由誓撰

利門
號 4130
卷 1-4

俳諧 正風 類林 發句集

江戸萬笈堂英大助梓

查
一
月
十
日
寄
本
館
忠
行
氏
贈

唐の姚平山曰俳諧と通俗の語也や
き此を讀み俳云乃文なり是を俳體
といふ本邦歌小依此体より連歌又是に
倭ふ今也といふ名目とありや此体乃
發句なりおそれる志う保といふ俳諧ハ
滑稽と評知る無下小洒落といふ
所常和歌の一体と云ふは實を言ふ

ゆゑもあはれと小祝物のあゝか
聴いし一丈花の大是なり是を正風と云
其のあはれは是なりと云ふは小祝
とわきま已に成るなりはあはれ
愛り同様の常をこれ由據のやうに付
其の正道をわきまと云ふは又これ
とあはれなり是なりと云ふは又これ
是なりと云ふは是なりと云ふは又これ

節なりと云ふは是なりと云ふは又これ
えれと云ふは是なりと云ふは又これ
一丈の雙紙なり是なりと云ふは又これ
是なりと云ふは是なりと云ふは又これ
梢の是なりと云ふは是なりと云ふは又これ
のを是なりと云ふは是なりと云ふは又これ
云の是なりと云ふは是なりと云ふは又これ
是なりと云ふは是なりと云ふは又これ

生

和什

嘉永三年霜月

俳諧正風類材叢句集

春之部目錄

睦月

一

今朝の春

韋廉士
藥
二

卷二

鳥迹

三

馬姪

初夢
三

羽子

水祝

番卸
四

細引五

桜

柳

六

木芽
七

爲
七

卷八

御意

八

下萌
九

若草九

松の花
九

若松

十

紅
數
八
十

雪解
十

落葉土

震

土

東凡
士

家菜十一

土
管
十

芽花

十二

紅梅
十

連翹
子

椿
士

蒲公英	十五	木瓜	十五	菜菔	十五	薑	十五
若和布	十五	蜆	十五	雉子	十六	鵲鳥	十六
牙返	十七	初雷	十七	如月	十七	二月	十八
治龍酒	十六	初午	十九	歎歎	十九	臘月	十九
春の月	二十	涅槃舍	二十	彼岸	廿一	燒野	廿一
細打	廿二	乙鳥	廿二	帰馬	廿二	猫	廿三
名能	廿三	上藻	廿四	初所	廿四	白魚	廿四
獨活	廿五	蕨	廿五	物脊	廿五	荏子	廿五
雲雀	廿六	蝶	廿六	蛙	廿七	田螺	廿七
陽冷	廿八	暖	廿八	水ぬり	廿八	長閑	廿九

永日	廿九	種蒔	三十	苗代	三十	水口	三十
梅	三十	荳角	三十	弥生	三十	新能	三十
鷄合	三十二	曲水	三十二	雛祭	三十三	草餅	三十三
胡葱	三十三	汐子	三十四	硯取	三十四	飴	三十四
枇杷	三十五	辛夷	三十五	初梅	三十五	梅	三十六
花	三十六	出代	三十七	春の海	三十七	春の水	三十八
春の山	三十八	風	三十八	峠	三十九	春の踊	三十九
峯入	三十九	卯辰供	四十	山吹	四十	鳥鳴	四十
鷺	四十	引鴨	四十	遅梅	四十一	山吹	四十二
藤	四十二	木蓮花	四十二	梨色	四十三	躑躅	四十三

新	里	小来也	里	農務外	里	積年	里
馬年	里	蚕	里	地穴を	里	爐塞	里
夷雨	里	別霜	里	新菜	里	飯箱	里
喜の暮	里						

仇徳正凡歌林表り集

為誰庵由哲撰



睦月

小童のやうな遊む睦月うれ
 夢のりのまきふもむ月小
 人乃来てそほくゆく睦月小
 睦月小や凡のはち所ぬ話狭
 招きけり家々へ行く月小
 遊ふ友類こゝろゆく睦月小
 何れもこの月をぬ睦月小
 雨の想えゆくハ何れハ睦月小
 拙疎

初夢

弦をたてもさるやうけめ一水
 兄と介よ木ノ氣なりろ路
 此くし小柳をさるるさるめ三四
 矢先を六何さるむろ始
 初夢の枕よんのかうろ外
 木川さるや目のさるれい水の音
 神ゆきとさるるさるるさるる
 はつ夢や誰うそもさるるる
 初夢や夜明さるるるるる
 木つ夢やさるるるるるるる
 初夢やとるるるるるるる

羽子

水祝

初ゆめをさるるるるるるる
 はつ夢やさるるるるるるる
 初夢や夜明さるるるるる
 木つ夢やさるるるるるるる
 初夢やとるるるるるるる
 木川さるや目のさるれい水の音
 神ゆきとさるるさるるさるる
 はつ夢や誰うそもさるるる
 初夢や夜明さるるるるる
 木つ夢やさるるるるるるる
 初夢やとるるるるるるる

經
史

其の風の来あけて春あり
 手とりふ抱て見せり春都
 もや底も人の多きやとあり
 春は路一下より風の来き我
 抱ひまや相やりつけに落し去る
 抱ひや志しを風毛そ散り
 けものひきれ雲をもけり底なき
 つる成やむより乃背を向ふ
 縋ひよよ子拭ひを穿て親を
 隠れの念を断つてふをさる
 はあめの神ね凡乃のこもり
 閑雅

又と柳や唐のほろろ
 言山
 追分や人ゆくくく柳あ
 麗水
 追分柳ハ風をくく
 里友
 出づて砂煙なる柳
 天真
 明きハのめりや柳の一
 松舟
 柳目よほくや川色のか
 巢居
 名れよ見そえのよ柳
 真女
 とりとめ顔のみく
 眉青
 明くいまよる沙光や柳
 南汀
 船の荷をゆて人居ぬ柳
 拙珠
 溪灯花雪の目阿ハ柳
 柳室

木
は
芽

葉そいそ柳さ春の柳
 由誓
 けむるふふれはさす
 昇丸
 花てうらけふあのは
 梅林
 顔よそく日ひそく
 對面
 そのまにむさふ
 文叔
 春もさけり
 夢遊
 春あそけは
 花外
 春こと
 尾村
 つる
 月
 誘ふ人
 拙珠
 人の
 杉曉

驚

光るやちみ味うよ才の口より
 玉英
 才の口より味うよ才の口より
 柳室
 驚に才の口より味うよ才の口より
 清南
 うやむすい二羽きて啼く静也
 壽川
 黄鳥や数えてきいたたき
 保水
 地よりきく一葉のきく伸ぶ
 樹石
 黄鳥や小松を 雲の種木山
 清光
 うやむすい枝にきくきくきく
 白起
 雲の初きくはやきくきく
 竹夢
 黄鳥の初きくきくきく 数珠
 真女
 うやむすい啼くきくきくきく
 丁知

餘寒

黄鳥や会ひ鳴かえに乃く
 一碩
 黄鳥やきくきくきく 雲の種木山
 甚陰
 うやむすい枝にきくきくきく
 拙疎
 板柳目よりきくきく 竹夢
 得燕
 板柳目よりきくきくきく 竹夢
 清光
 石をきくきくきくきく 雲の種木山
 氣友
 猿の籠屋の口よりきくきくきく
 珠弓
 才の口より味うよ才の口より
 清南
 小松の口より味うよ才の口より
 象雄
 乾壁の口より味うよ才の口より
 繁水
 餘寒の口より味うよ才の口より
 三餘

浙
志

見たりはる河津とまされの集家
田の水乃まされふつふよかんや
乃のあや深 お種や御忌消
り忌の澄すやひよりんふなる
まゝ出て居ていそ所忌まゝそ
兼以乃掃ひ 竹まき水忌消
りの忌越えてさけり河忌の澄
彦ふくまき娘なりや御忌消
数人のあやの深なるや御忌消
以忌の澄すつてんやなるあや
おありお耳ふえ入ぬ所忌のり祿
危年 拙疎 抱叔 氣雄 花外 一水 一庫 尾村 芳水 危年 由橙

下
萌

下流の川をさぐりて、ふたつにわかれ
下りたる世も久しきを月より上
下流の川をさぐりて、爆竹河
さぐる所の地は、龍阿の古松茂
下りたる川の龍出ず、山崎家
春蔵や田村と結ぶともなる所
下のえやむろのよきとあり
わづらひの深きを見せし麦一具
あそびやまゝとしに種目とある
弓の射や木の枝が埋む川の中
あそびや砂地斗りたり所は河走

ト山
梅麟
之餘
春世
豊里
抱叔
梅岐
一具
永丈
河甫
功甫

著
松

花外 波崎 象雄 一甫 豊二里 養老 松疎 春世 尾村 抱叔
 藤原のりそつるさうのき 所澤のよめく青やまのき 名あつやん性福をきてけき ありのれりちり一木に 名松やあゆりなる娘の所 ありくー名まふと親をけし 月のかうきー凡の顔ある 般人やきの病候をきある 般人なるりけり何はあり 書文りのいあるきそく病りるき 病入やきよーて病ぬるき何

雪解

数入のけりうのんひとら那 杉曉
 書文入や川入ト新成提てり 一破
 や入のきりや眼洗をるゝをる 三石
 数り乃事そりたてり杉水 文叔
 たり洗く書本戸の雪解 光高
 雪とけてあそふまに成まけり 里友
 計授ふををるゝ雪解 亦文
 雪山の雪解 亦まけり成 月夕
 雪とけや部よりあそり杉曉のゆゑ 杉曉
 雪とけや部よりあそり杉曉のゆゑ 杉曉
 雪解や何成見て雪 海馬 同雅

蕨

蕨

雪うて見洗く雪をるゝ蕨の書 樹林
 解洗く雪をるゝ雪をるゝの書 可蕭
 雪とけの地なりゝ雪とけの地 清身元
 雪とけの地なりゝ雪とけの地 守一
 雪とけの地なりゝ雪とけの地 孝山
 雪とけの地なりゝ雪とけの地 祖順
 雪とけの地なりゝ雪とけの地 杉曉
 雪とけの地なりゝ雪とけの地 丁知
 雪とけの地なりゝ雪とけの地 花外
 雪とけの地なりゝ雪とけの地 象雄
 雪とけの地なりゝ雪とけの地 節之

東風

春士

山崎の聲と三度めきすゝり
常流品所をく——ろ川　平々
鹿阿く音のやうゆかすこ式
ろありえおハ流れてくもつ子こ
而てそ風毛ぞふり　寂けり
あむじや海　わてまの面皇よ
遠里そく子この中　能成代
うちむじや　要なる——上山の流
さわ——上まを去ハせぬふり
物事凡や譲りのまづのかたなは
以てちるれあるの葉の初のをん

切南　驪龍　一水　る松　杉曉　文叔　扇賀　閑雅　兔年　梅窓　不里

嫁菜

宵のちや東凡ふ来ふは清きなり
 初よりや春乃何ふ水かういぢる
 東凡ふや春は清きなり里より
 泊り居る所へすて東凡ふは清きなり
 夕東凡ふや春は清きなり小凡ふは清きなり
 初よりや春は清きなり水の方
 東風ふくや松は白ひ一掃のう
 こころは春は清きなり知のぬき清きなり
 春風ふくや春は清きなり上
 子にこれる春は清きなり
 ひとあはれなり春は清きなり

松竹
 暖山
 龍友
 楊柳
 柳枝
 簾外
 草雨
 草青
 豊里
 木丈
 尾村

土華

萼花

樹木屋ひひ花れ一 嬌柔け 清見
 鳩の歌うさく 嬌柔つゝたう 象雄
 川海よりおれぬ人やよめあふ 守一
 多い望み事とてまうやけくじ 抱叔
 若くともをばやも思ふやうじ 凍色
 まゝの跡をきき見もあつてまう 三四
 ひとあつたつたす 廣野のちみけ 守一
 阿の代んて梅をたかやうに 天真
 目よりききかきわけとてまう 戸素
 外はほむそとて阿の望のほく 花外
 若くともをばやも思ふやう 春也

紅梅

樹木一ひひ花れ一 嬌柔け 竹夢
 桜の代んて梅をたかやうに 可簫
 紅き一梅をききわけとてまう 龍一
 風よりききかきわけとてまう 幽峰
 雨をききかきわけとてまう 三沼
 かなり一梅をききわけとてまう 天真
 紅梅や春をききわけとてまう 給市
 紅梅や尾のききわけとてまう 南雄女
 紅梅や月をききわけとてまう 新田子
 紅梅や春をききわけとてまう 可簫
 紅梅や月をききわけとてまう 象雄

連翹

紅梅や見し處にて行人のあり
 柳や光りて枝は暖まる
 紅梅や金く煙を散る
 連翹よ来て花夢ふ小智のな
 を翹や夢みにして掃きせん
 連翹の地より名はたみせ
 連翹に春分ひくる紫屋うね
 走翹の花より御乃すより
 連翹れさひくくるはより
 走翹のりもあえなり木より水
 連翹や夢乃以てさへ夢を覚せ
 涼風
 花外
 暖山
 由起

蒲上英

たむわやんあふもれはるる人 尾村
 蒲上英やむと樹つのもふなり 北叔
 多む海や遠くうら眼よつと妻さ 波鷗
 蒲上英やふは穀物まづり 岸角
 蒲上英やあふ乃水たまり 夢香
 たむわやあふにふ乃ふの崩を 梅蘇
 笹刈てひろり屋や木瓜の花 白起
 木瓜咲や畔ふはるる高 新 春世
 りの持をふれふひきそ木瓜のむ 糸燈
 持海の阿り持れ見えんあけむ 花外
 照るや木瓜やあふあふささく 浮世

木瓜

菊苗

菊苗やうくの詠老ふ人 光年
 持えすもふに見えたりや菊の苗 菊風
 さく菊れふは持海 小笠原 北叔
 菊と白やう詠老ふ人菊の苗 波鷗
 菊苗やなま囲ひ 印 岸角
 菊と菊やおく人とのそく垣 一碩
 菊とけの菊や阿ふは縁の菊 由松
 菊とふれふふふふふふふ 尾村
 菊とふれふふふふふふふ 豊里
 菊とふれふふふふふふふ 波鷗
 菊とふれふふふふふふふ 西甫

華

若和布

規

くらや二三日なりふ何くうよ一破
 蓋さや見ふ日あつた色に夕 危年
 照る所乃くふる見んそふお布や 木丈
 世を安しきふあつたのふお布や 南旗女
 朝陽は光より何くふくつた水 閑雅
 春の吹く海より何くふくつた水 幽峰
 秋の風は来ふふ見んそふお布や 栄居
 若お布ふくふや夜の色より 杉曉
 いそふふ味を地より 規我 花外
 ぬるふふ雨をいそふや規我 戸壽
 おおけふ船はけふのふて規我 真女

雉子

のふふそやおふふぬふふ規我 涼花
 年やて雲くきくふ星規我 壽川
 春のけふのふふふふの聲 岱年
 春のけふのふふふふの聲 豊里
 波のけふのふふふふの聲 清有
 啼のけふのふふふふの聲 花外
 春のけふのふふふふの聲 拙謙
 春のけふのふふふふの聲 春世
 山のけふのふふふふの聲 菊頃
 雉子のけふのふふふふの聲 白起
 雉子のけふのふふふふの聲 言山

駒鳥

はかりぬの目よりくはや煙子あす 象雄
 葉生やあふ入凡にきれこゑ ト早
 年々やあつたてあつた谷の駒鳥 松竹
 駒鳥啼やあつたあつた水乃上 尾村
 人あつたあつたあつた 駒鳥のあ 花外
 岩あつたあつたあつたあつた 抱叔
 山あつたあつたあつたあつた 一芝
 駒鳥のあつたあつたあつたあつた 象雄
 駒鳥のあつたあつたあつたあつた 守一
 駒鳥のあつたあつたあつたあつた 松竹

河返

駒鳥のあつたあつたあつたあつた ト早
 駒鳥のあつたあつたあつたあつた 翠葉
 駒鳥のあつたあつたあつたあつた 白起
 駒鳥のあつたあつたあつたあつた 岡田
 駒鳥のあつたあつたあつたあつた 戸喜
 駒鳥のあつたあつたあつたあつた 尾村
 駒鳥のあつたあつたあつたあつた 一芝
 駒鳥のあつたあつたあつたあつた 杉曉
 駒鳥のあつたあつたあつたあつた 嘉川
 駒鳥のあつたあつたあつたあつた 三餘
 駒鳥のあつたあつたあつたあつた 由提

初雷

鶯啼や初雷をすね 原を尾村
 鶯ややそ所雷に里乃うと 気友
 起はちよは初かありのそあや 芳水
 野に中や初をあらに漱きひ 波鴉
 原やそまそにふりん春の雷 幽峰
 遠け所とちつ雷かちさぬ 葉香
 高う詠ふ神を所めて鳴なり 尚九
 まゆふやそあやぬ強のすきひ 稚陰
 如月やそよつ詠ふ草の庵 翠蕉
 田舎のそ我見てある二月 松海
 おうーと春の初ひく 二月 深是

如月

二日 亥

如月や春をこの案に味はけく 波鴉
 起きふのふよまらむむ根水 草雨
 衣更そや詠ふ人うそ人 系外
 二月や詠ふまそつ詠作芝 ト子
 いふのそよひまそまそ 葉香
 如月や詠ふのちの詠おつまる 三浪
 時そそき月のかみむ言 拙誠
 如月やんま詠ふ 昨乃味 南枝
 春のそよや詠ふき詠ふ峰の月 暁山
 詠のたきまそあつちのつ 言々 波鴉
 詠れふのちのちのちのつ 言々 扇賀

治世酒

花阿の等々連子ありたり二日等 丁知
 破り者もあふなりすもや二日等 保あ
 おりつゝこれのまやふけう等 對南
 二日等ありあふなりすもや二日等 深是
 出るゝらにふたふたて二日等 尾村
 治世酒やさあつゝ種々あふなり 春世
 治世酒やさあつゝ種々あふなり 女
 治世酒やさあつゝ種々あふなり 白起
 治世酒やさあつゝ種々あふなり 幽峰
 治世酒やさあつゝ種々あふなり 象雄
 治世酒やさあつゝ種々あふなり 席角

初午

治世酒やさあつゝ種々あふなり 花外
 初午や初振の桂畑乃 橋一具
 是よりや初振の桂畑乃 白起
 は初午の日はあふなりすもや二日等 珠弓
 初午や初振の桂畑乃 玉蓉
 初午や初振の桂畑乃 里友
 初午や初振の桂畑乃 花外
 初午や初振の桂畑乃 芳水
 初午や初振の桂畑乃 寄一
 初午や初振の桂畑乃 松疎
 初午や初振の桂畑乃 山外

鞦韆

鞦韆やよいそり 俵ひより 元年
 物うらや 塙んおきよきそり 豊海
 うらや 中継とまらぬ後つゝ 抱叔
 鞦韆より 舟を 笠の 海老山 捨市
 鞦韆を 笠を 舟を 笠の 遊ひ 象雄
 うらや 舟を 笠の 舟を 笠の 深谷
 舟の 舟を 笠の 舟を 笠の 杉曉
 旅人を 連て 舟を 笠の 舟を 東川
 舟の 舟を 笠の 舟を 笠の 保水
 うらや 舟を 笠の 舟を 笠の 墨農
 見阿を 笠の 舟を 笠の 舟を 對南

朧月

朧月やよいそり 俵ひより 乙良
 物うらや 塙んおきよきそり 抱叔
 うらや 中継とまらぬ後つゝ 抱叔
 朧月より 舟を 笠の 海老山 捨市
 朧月を 笠を 舟を 笠の 遊ひ 象雄
 うらや 舟を 笠の 舟を 笠の 深谷
 舟の 舟を 笠の 舟を 笠の 杉曉
 旅人を 連て 舟を 笠の 舟を 東川
 舟の 舟を 笠の 舟を 笠の 保水
 うらや 舟を 笠の 舟を 笠の 墨農
 見阿を 笠の 舟を 笠の 舟を 對南

春の月

春の月やよいそり 俵ひより 元年
 物うらや 塙んおきよきそり 豊海
 うらや 中継とまらぬ後つゝ 抱叔
 春の月より 舟を 笠の 海老山 捨市
 春の月を 笠を 舟を 笠の 遊ひ 象雄
 うらや 舟を 笠の 舟を 笠の 深谷
 舟の 舟を 笠の 舟を 笠の 杉曉
 旅人を 連て 舟を 笠の 舟を 東川
 舟の 舟を 笠の 舟を 笠の 保水
 うらや 舟を 笠の 舟を 笠の 墨農
 見阿を 笠の 舟を 笠の 舟を 對南

彼岸

涅槃會や、五根之の山の寺
梅曉
終るむきや、之を病ふまぢの
完臨
涅槃会や、終るむき何と何
松曉
古里新なりし如きう涅槃う那
葉者
涅槃会は終るまじぬわん南
夢枕
ぬけきや、終るむきむ終るむ像
弱笑
ふくく出するううう涅槃式
文叔
流よりありかすうの涅槃とあよそ
由是
字即ておそいさうなう破岸式
抱叙
水に枝るきゆく彼岸うな
杉曉
小娘に並ぶ背負りてひらむ水
常月

焼野

古よりひらいてかゝる彼岸哉 保水
 芝草少人の所をて彼岸を 永丈
 ひつむるなりぬ残るは如く 花外
 出づ先よりふかきひらけ 竹夢
 静る言て一ひらけ 波路
 水よりとるは静なり 玉露
 春や 樹の世の如く 秋
 春のひくも見えて 深色
 焼野 春世
 陵と珠の如く 秋之
 春のひくも見えて 抱叔

烟お

焼くちをて 象旌
 果見えそ 氣友
 枯樹より 天真
 笑並に 翠意
 烟おや 樂高
 細くも 秋之
 幽峰
 抱叔
 天真
 氣友

乙酉や去年の頃迄は却て静
寂なり一閑のみの葉より葉は燕
言をやはらひし里を土境普請
二軒より出て行遠ふ乙酉より凡
燕よりおふふふふふふふふふ
湿雨降り新ふふふふふふふ
傘ふふふふふふふふふふふ
言ふやふふふふふふふふふ
人よりぬふふふふふふふふ
時の雨ふふふふふふふふ
湖ふふふふふふふふふふ
南雄女

啼雁

片に凡そ中少くありて馬
 牙中やあまをのれて帰雁
 雁のゆくをみるもわづき
 かなる風は所獲余加つる
 水田にそ月を照してうる
 男我よりそ鳴をけりや猫
 のうへをうへるもあつて猫
 なまきと詠めたりや猫の
 意をてむるものも見え猫
 屋への物もあつて猫の意
 原のひいて猫の意もあつ
 て猫の意

若 點

聲、あすは、りりき、ぬ、猫の、あ、白、起
 猫の、あ、り、あ、む、り、あ、想、の、は、あ、抱、叔
 月、を、あ、あ、あ、あ、り、や、猫、り、あ、寧、流
 新、光、の、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、真、女
 恋、猫、や、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、完、熟
 恋、猫、や、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、尋、香
 若、點、や、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、瓦、村
 月、を、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、草、風
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、芳、水
 わ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、春、世
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、抱、叔

上 葉

初 朝

休、む、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、西、曙
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、一、芝
 若、點、や、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、回、留
 わ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、先、年
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、秋、之
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、一、丸
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、三、餘
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、尾、村
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、花、外
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、曙、山

獨活

獨活
蕨

山ささぎを起す世のさふやわらわら
消さるぬきふくむ物活の萌
みうも把てそのひぬ物活
山鶴活や梅え接ふありし
抱く来て先見物活の音
山鶴活と白のや雨の星上あり
翠をさふさふやわらわら
了る能やその活の音の
歌花やそのさふさふ
煮ぬるもそのさふさふ
了る能やそのさふさふ

波鶴
梅海
花外
松曉
一頃
象雄
汎翠
梅遊
切南
花外

蛙

瑞手とてをたそふ来ふ小幡
 城角より来るもむすよ家居中
 暮る時や何をいふまはの音
 出るとは城の影さむ建屋我
 跡芽生にふれぬ所ぬ於城
 浪きこや歌ありすむ城一ツ
 城くやあるものなるなり
 啼城あるもの言ひりの清
 門前へ所ふありる望啼城
 木の影のさする成啼城
 戸母あつ風そらうそなく城

丁知
 菊頃
 高川
 珠弓
 山外
 汎翠
 祖郷
 一具
 清亮
 象雄
 完瑠

沙ひけふと戸はあく煙
 雨の煙や都の空に啼煙
 夕暮の空を煙とて鳴る
 鳴る煙のいたる所もなす煙
 眼の光も人をもてなく煙
 夕暮や人の煙とて鳴る煙
 啼煙とて煙とて人の煙
 丘の煙や水とて鳴る煙
 水と煙とて水とて鳴る煙
 遠ひ出て水とて鳴る煙
 水と煙とて水とて鳴る煙
 丘の煙や水とて鳴る煙
 水と煙とて水とて鳴る煙
 遠ひ出て水とて鳴る煙
 水と煙とて水とて鳴る煙

陽炎

目の奥に鳴きとるをね田子
 水中に風を吹くを白雲う丸
 土橋のうらで追ふた所は
 大平のうらふらや啼回欄
 背にうすはりの水や鳴回欄
 陽光の庵の千草も名残り
 陽光やとて陰もそなたの
 陽光やとて陽もそなたの
 かげのうらの中は一羽の小鳥
 のうらやとて陽もそなたの
 陽光やとて陽もそなたの
 完嶺

暖

乃そやそあ先のう木にけく 龍友
 かけろやや田ふりあ出た橋きけ 戸素
 阿くうれきあえん中り之集 象雄
 るもほきてて田貝控や暖る 珠弓
 暖や阿とあくくく水の垢 保水
 暖にあらや芽をぬえ困ひ粟 梅岐
 さああうう暖るくくく如く所 暖山
 阿くう龍骨や用あふ人あふ 一頑
 あくうや持偏ちあふ素桑搔 祖卿
 甲そ人の氣通ふああぬむ 杉曉
 鳥のあふまへにあんのぬく 味舎

水ぬむ

長閑

望のふりぬあふんわぬぬぬ 抱叔
 ぬもほぬもみて水のそえあ、
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ 三餘
 其の川のり南やぬむむむひひ 象雄
 足かろややぬのぬぬぬ一在而 龍友
 かろのうぬぬぬや谷を出水 竹夢
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ 眞女
 のとろや ぬぬぬぬぬぬぬ 清甫
 長閑あふぬぬぬぬぬぬぬ 示丈
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ ト早
 小流あふぬぬぬぬぬぬぬ 松舟

永
日

早入や雪のふりもなほ
 春未だや花の香るなり
 のとややおきては人も
 祈のたよりをいふ人
 里ゆく嫁のまゝなり
 めい水とくちかき
 永よりん朝日さす
 ゆ水をえたる
 流しけり
 借りて
 心所へ

完
 杉
 夢
 抱
 一
 半
 楊
 白
 芳
 如
 鼎

水口祭

新しき木と見えて通くや苗代田 杉曉
 霧らうよ月のふもや苗代田 一水
 苗代や休光のうき足乃泥 一頃
 なりし後や露を露のふもや 夢帆
 ろの光のふもやとそよそよ 豊里
 不之眼をうつす水りふもや 涼翁
 水に鏡のふもやとそよそよ 波鶴
 丘番をふもやとそよそよ 可簫
 その月と月の眼とふもやと 抱叔
 りと一見とそよそよと 撫陰
 海にける新掬て来り撫陰 三餘

接木

木を木と接するは接木なり 玉蓉
 接木なりと接するは接木なり 清甫
 不接するは接するは接木なり 文叔
 木を木と接するは接木なり 象旌
 不接するは接するは接木なり 抱叔
 接木なりと接するは接木なり 天真
 接木なりと接するは接木なり 光年
 接木なりと接するは接木なり 珠弓
 接木なりと接するは接木なり 完勝
 接木なりと接するは接木なり 象旌

芦角

川を河と接するは接木なり 象旌

弥生

春の芽や川に流るる水さうい
 ひくやそむくもあつたる南田子
 家子のうきうき笑ひて浮き出
 何れとわづらひのふは生れ一南
 人も元ぬあつたる浮き出
 娘はきく人のこゝろあつたる
 ひくやそむくもあつたる草雨

新緑

鶉合

春の芽や川に流るる水さうい
 ひくやそむくもあつたる南田子
 家子のうきうき笑ひて浮き出
 何れとわづらひのふは生れ一南
 人も元ぬあつたる浮き出
 娘はきく人のこゝろあつたる
 ひくやそむくもあつたる草雨

合さる鴨や赤くく聲もほ
おつと阿ふ座るや驚阿老
鶺鴒れうぐぐやふ難あそ
鶺鴒合さる阿ふ水の跡ま角
附髪の傳りゆりや鶺鴒合
片の上阿ふ即ち残峰や尤鶺鴒
あふや雪をかく事。水の末
あふやけふのさへ橋の首
曲水や起さる路のなると見
曲水や柳の新し産を忘ぬ
あふやしら白髪に流さず

花外
樂富
采雅
三沼
暖山
抱叔
幽峰
喜世
花外
波瑠
涼舟

雛
糸

曲水や何ふささる人の心
 ぬふやの流志とあふれ也
 曲ふふ流てすありやう素袍式
 龍のるをあはれはすを按撫
 買ふ人をもつたるをてを龍
 為んや龍の波も去来を年
 してあはる世と見ふれを龍
 新市やあやしの地即ち
 買ふ人の玄素すけなり年の龍
 龍柳の世帯とての急あや
 買ひやうを色ふと見ふれを龍
 象雄

蛤

桃

硯より波に遊んで素座より
 幽峰 春の場も花を事や硯を
 竹友 折るく関を待て硯より
 田子 ぬるく関を待て硯より
 由磐 春の場も花を事や硯を
 二泊り 春の場も花を事や硯を
 酒乃碑 月夕 蛤やかくつらう春の場も
 硯を 春の場も花を事や硯を
 梅峰 春の場も花を事や硯を
 一具 春の場も花を事や硯を
 白起 春の場も花を事や硯を
 清南 春の場も花を事や硯を

辛夷

桃より波に遊んで素座より
 完瑤 春の場も花を事や硯を
 天真 春の場も花を事や硯を
 花外 春の場も花を事や硯を
 素山 春の場も花を事や硯を
 彌生 春の場も花を事や硯を
 地叔 春の場も花を事や硯を
 直女 春の場も花を事や硯を
 糸香 春の場も花を事や硯を
 月夕 春の場も花を事や硯を
 波路 春の場も花を事や硯を
 深谷 春の場も花を事や硯を

初禪

花より橘の古葉よ柔ひれり
堤より低き新緑や西郷咲
あけぬきの跡もさへ笑草夾代
ふらりの家なをよめや不情梅
はさきそふ風のあまや初春
去来しもの嘆て所より神様
ゆりのよのきこひあても初桜
人をすゝ葉のゆあやはわさる
比投無き蒼たなくそ物ゆつ霞
あかきしら顔もありし初梅
人教もすべし古歌を思ふなり

先年
寿川
拙疎
白起
菊古
保水
兎年
光祿
一色
天真
文叔

春の水

[illegible]

春の山

几中

春の山柳のふよふふりり 杉咲
 何れそとくしふあふりき山一丸
 里をくまてはるるや春の山 木丈
 杉の根をきりありやをるる山 龍友
 切中ふふむ人や橋のうき 常雨
 雪あけの目えなききや山 言山
 雪あけの目えなききや山 言山
 梢よりあふりき根かや風や 對南
 大い中や横よりあふりき寺小浜 非壺
 けく風をゆきあふりきのあり 芳水
 竹友

降

壬生踊

橋よりあふりき春のふりり 半月
 野よりあふりき春のふりり 抱叔
 降 龍友 大い中や横よりあふりき寺小浜 非壺
 笠の門よりあふりき春のふりり 祖心
 秋降の何れそとくしふあふりき山 清南
 龍友の何れそとくしふあふりき山 言山
 葉よりあふりき春のふりり 龍友
 降の何れそとくしふあふりき山 言山
 うかきと降りき春のふりり 白起
 先き角よりあふりき春のふりり 抱叔

鷺

三 治
 三 四
 三 五
 三 六
 三 七
 三 八
 三 九
 四 〇
 四 一
 四 二
 四 三
 四 四
 四 五
 四 六
 四 七
 四 八
 四 九
 五 〇
 五 一
 五 二
 五 三
 五 四
 五 五
 五 六
 五 七
 五 八
 五 九
 六 〇
 六 一
 六 二
 六 三
 六 四
 六 五
 六 六
 六 七
 六 八
 六 九
 七 〇
 七 一
 七 二
 七 三
 七 四
 七 五
 七 六
 七 七
 七 八
 七 九
 八 〇
 八 一
 八 二
 八 三
 八 四
 八 五
 八 六
 八 七
 八 八
 八 九
 九 〇
 九 一
 九 二
 九 三
 九 四
 九 五
 九 六
 九 七
 九 八
 九 九
 一 〇 〇

引鴨

遅
櫻

雨ふぬめりりて鴨の引ふり白起
 引鴨や川へ出づ来り田の隅り 杉谷
 鴨引て見たりぬす流丸式 夏燕
 夕暮や鴨ひく羽の小くうり 柳雨
 引鴨や沈まぬそそのふり 海鱗
 鴨を引流ハ運さる人阿橋木 景風
 鴨を引れをとりて見るや遅桜 山歌
 遅桜やかながれそふり 三治
 おそ暖もりの隅り阿橋木 三餘
 借家や阿橋木も遅桜 柳岐
 世の心を名跡なくして遅桜 席角

山
吹

藤

花のそを樹をとりておそ桜 要五
 さなりし人そそ流ハ運桜 梅鱗
 山吹や阿橋木も遅桜 尾村
 山吹や阿橋木も遅桜の阿 切南
 山吹や阿橋木も遅桜の阿 夏燕
 山吹や阿橋木も遅桜の阿 波路
 山吹や阿橋木も遅桜の阿 花外
 山吹や阿橋木も遅桜の阿 龍文
 山吹や阿橋木も遅桜の阿 山
 山吹や阿橋木も遅桜の阿 象雄

糸織羅の衣ふき居や藤のむ 白起
 ありけを花や連珠も表ふり 清見
 藤咲や村まのありたきう船 櫻海
 人退てそふたちのー藤の花 光年
 船ふのー藤花ふのまてふれむ 珠弓
 菱柳や船そ藤ーふ花時表 巫女
 船うらふんえふ花や菱のそ 眉青
 此のうそ藤花ふ本や木蓮花 抱叔
 石膚の藤花ふの藤木蓮花 三餘
 花さうぬあまうふ花木蓮花 翠蕉
 ちりしちや藤花ふひりぬ木蓮花 祖以

木蓮花

梨花

柳花

ー藤のう見え居や木蓮花 采石
 梨花やひもふ花の藤の藤 杉院
 人のむを藤ふそふ梨花 抱叔
 花ぬぬふ花のー藤花 櫻山
 そふふふ花の藤花 月夕
 梨花をさくや木蓮花 席角
 古家の系図をふや梨花 圓為
 花藤ぬけの藤ふさか藤花 一具
 岩藤子花藤ふも藤花 抱叔
 花さく人ふんう藤花 一南
 切ひくふふふの藤花 白起

劉

一芝
 凉花
 象旌
 天真
 抱叔
 尚九
 一水
 清南
 花外
 三泥
 芳水

種 茅

わづらひと物あけでわづらひ 葉凡
 味ひも思ふや志れむうづけ 夏世
 伸よりにそのえおれり志る竹 花外
 常いともも擇ぬおやめうづけ
 継よりれおふぬら若る竹 竹夢
 種茅やう人ともは 家 白起
 左孫茅の巻はたるは 松谷
 うぬ茅はてあがり寺の脊戸 瓦村
 種茅や懐く春に一花あり 可蕭
 種茅もわづらひの竹の下 兔年
 閑山のまゝやうき 茅は種 由持

馬 茅

蚕

ゆきなり梅を咲て馬茅は 抱叔
 阿りさうな木のまゝは馬茅は 一
 水けでわけは馬茅の出る馬茅は 月夕
 青ふ来てゆき馬茅の種は 席角
 馬茅はさそそ馬茅は水 可蕭
 青そそ人馬茅は馬茅は 龍丈
 糸もも馬茅は蚕の種は 乙良
 明てゆくかこのうき蚕は 應里
 けあえ又ひき馬茅は 柳麟
 せきくとも馬茅は馬茅の 戸嘉
 馬茅はて馬茅は馬茅の 波路

[illegible]

爐
塞

春
雨

煙草をたきよは旅籠の煙草を
 炉裏や中々の風乃内に入
 旅籠の煙草やおもては是の金
 ちぬきや旅立のたぬ忘れ
 煙草をたきよは旅籠の煙草を
 炉裏や中々の風乃内に入
 旅籠の煙草やおもては是の金
 ちぬきや旅立のたぬ忘れ

春風は柔らかなる人の子
 まるくや移る心も是を境
 新雪の如きは白りたる雨
 去るや下流にひき流し
 まるく阿光も満天の月
 誠にもていつ降や夢の面
 新くにちも成るやはより
 眼ふらる市のおもひや別れ霜
 掃くそ松屋のまゝおのれに
 ひとも葉よわりかきおのれに
 傳へる思ひはとあやめ共
 兔年

飯
塙

其の香を先外後の新葉所
 色を香もうらひなり新葉所
 小島峰極へ抱きすむ葉片
 旅伴のちり念入新葉を
 飯嶋乃敷うき下木か
 いの嶋のそとあもすふか
 い玉輔やそふ合船のあま
 飯嶋や馬絨を榮懐もひ
 常あをる飯嶋をむす旅
 いの嶋のいそそ七所へ
 そとうき花をあらて香の
 花外
 三四
 草雨
 驢蹄
 瓦村
 完鶴
 新谷
 秋之
 花外
 由野
 松嶋

春の暮

川急をさへふえすは安の聲
 小山の聲をむねやふるの聲
 立止る声を一程酒の香の聲
 立止る声を一程酒の香の聲
 白起

Handwritten text in a cursive script, likely a diary or journal entry, spanning several lines across the right page.

